

アイルハルト・フォン・オーベルク

『トリストラントとイザルデ』 (1)

小澤昭夫訳

はじめに

本稿は、トリスタン物語の一つ、アイルハルト・フォン・オーベルクによる『トリストラントとイザルデ』の散文訳である。

アイルハルトのこの作品はドイツ語で書かれた最も古いトリスタン叙事詩であり、未完に終わったゴットフリートの作品、断片しか残されていないベルールとトマの作品に対し、唯一トリスタン物語の首尾一貫したテキストを示しているものである。

作者のアイルハルト・フォン・オーベルクは、作品の終わり近くで自ら名乗を上げている。「オーベルクのアイルハルトがこの本を書いた」と。その名前は、D 写本では von Höbergin her Eilhart (9446 行) だが、H 写本では von Baubenberg Segehart (9644 行) である。

この名前以外、彼の生涯については何一つ伝えられていないが、Buschinger (2004) は、彼が聖職者の教育を受けたことがあり、ブラウンシュバイクのハインリヒ獅子公 Heinrich der Löwe (1129/30-1195) の宮廷の宮内官 (Hofbeamter) であったとみなしている。

作品の成立年代は、早ければ 1170 年頃、遅ければ 1185-90 年で、見解が分かれている。

アイルハルトの原作品の伝承は、三種類の断片 (12 世紀と 13 世紀初期) に限られている。すなわち、

1. レーゲンスブルク断片
Rd (Donaueschingen), Rm (München),
Rr (Regensburg)
2. シュタルガルト断片 St
3. マクデブルク断片 M

である。なお、さらにもう一つの断片 (13 世紀末期) がその後オーストリアで発見され、こちらはその発見場所から SP (St. Paul in Kärnten) と称されている。

作品の完全稿は、15 世紀に成立した 2 種の互いに異なる紙写本に見られる。すなわち、

1. H ハイデルベルク写本 (15 世紀の最後の 1/3 世紀)
2. D ドレスデン写本 (1433)

である。

トリスタン物語はチェコ語にも翻訳されている ('Tristram', 15 世紀の後半または最後の 1/3 世紀) が、これにはアイルハルト作の中の三つの箇所が含まれている。

アイルハルトの 'Tristrant' は、15 世紀末には散文 (Prosaroman, 初版 1484 年) に改変された。この民衆本散文トリストラントは、アウクスブルクで初版が出て以降、1664 年までの間に合わせて 14 版が刊行されている。

翻訳の底本には、Buschinger の編集による写本 H に基づくテキストを使用した。翻訳に際しては、Lichtenstein の編集によるテキスト写本 D に基づく一を適宜参照し、また Buschinger/Spiwowok (mhd./nhd., 1993) による現代ドイツ語訳を参考にした。テキスト等の詳細は末尾の「テキストと参考文献」を参照。

Buschinger 版では、本文の左側に行数が 5 行毎に記されているが、この散文訳では、原文の対応する箇所の行数を、訳文の末尾に (1-29) のように示すことにする。

なお Buschinger 版では、右側に Lichtenstein

版の対応する行数が()付きで示されている。

上記Buschinger版のテキストは全体で9722行あるが、今回訳出したのは「1 聞き手への前口上」から「4 モーロルトとの戦い」の途中まで、819行である。

上記のような章毎の番号と標題は、Buschingerのテキストには付いていないが、ここでは便宜上、Buschinger/Spiewokの現代ドイツ語訳に付けられた標題を借用している。

第5章以下の標題とその章の大まかな内容は、次の通りである。また登場人物名も、この現代ドイツ語訳の書き方に従っている。

- | | |
|---|--|
| <p>5 アイルランドへの治療の旅</p> <p>6 アイルランドへの求婚の旅 (燕のエピソード、竜との戦い、内膳頭の欺瞞を暴く)</p> <p>7 媚薬</p> <p>8 ブランゲーネ (イザルデのための自己犠牲、イザルデによる暗殺計画、和解)</p> <p>9 愛のための戦い (見張られていた密会)</p> <p>10 死刑判決と逃亡 (礼拝堂からの跳躍、イザルデの救出、猟犬ウータント)</p> | <p>11 森の生活 (二人を隔てる剣、隠者ウグリム、イザルデの返還)</p> <p>12 アーサー王のもとで</p> <p>13 最初の帰還と冒険 (オオカミ用の罠)</p> <p>14 ハヴェリーン王のもとで (ハヴェリーンの息子ケヘーニスとの友情、居城カラーエスの防衛、ハヴェリーンの娘イザルデとの偽装結婚)</p> <p>15 二度目の帰還と冒険 (大胆な水、トリストラントの釈明、魔法の枕、イザルデとの仲違い)</p> <p>16 三度目の帰還と冒険 (ピロルゼの仲介、巡礼者トリストラント、危険な騎馬試合)</p> <p>17 ケヘーニスとガリオレー (I)</p> <p>18 四度目の帰還と冒険 (遍歴楽士トリストラント、旅芸人ハウプトとプロート)</p> <p>19 五度目の帰還と冒険 (トリストラントの負傷、狂人トリストラント)</p> <p>20 ケヘーニスとガリオレー (II) (密会、ケヘーニスの死とトリストラントの負傷)</p> <p>21 愛の死</p> |
|---|--|

1 聞き手への前口上

ここにお集まりの皆さまは、私に物語を語れとお求めです。皆さまに物語を語るからには、喜んで最善を尽くします。

けれども私は恐れるのです。この中には、私の話など聞きたくない人がいることを。そのことは甘んじて受け入れましょう。

反感をすぐに口にして止めない人がいると、その人にまた幾人かが従うのです。その人たちにも私の話が気に入らないからです。けれども、その方たちがそのような意地が悪いことは、得にはなりません。否応なくここから立ち去らねばならないからです。そのような振る舞いは卑劣と呼ばれて咎められ、その振る舞いの償いをしなければなりません。

そのような方々には、ここで御忠告申し上げ

ます。そんな悪意ある振る舞いはきっぱりお止めなさいと。人が喜んで聴き、それを聴いたならば有益であるような話の邪魔をする者は、善いことと真実を見る目がないのです。(1-29)

私の物語は、多くの人にとって、自分の知的な能力を高め世の中を見通すことに役立つものです。それではこれから始めましょう。皆さん、どうかお静かに。

私は、トリストラント殿について書かれた本で見つけた本当の真実を、皆様に嘘偽りなくお伝えするつもりです。

トリストラント殿が、どのようにして生まれ、どんな驚くべきことを行い、どのような最期を迎えたかを。

また、彼がこの世で始めたことを、どのよう

に成し遂げたかについても。

さらには、この抜け目ない人がどのようにしてイザルデ姫を手に入れ、その後、彼は彼女のために、彼女は彼のためにいかにして死んだか

についても。

物語が伝えようとすることに、どうか御注意ください。耳を澄まし、退屈などなさらぬように。さあ、これが始まりです。(30-50)

2 トリストラントの誕生と教育

トリストラントはどのようにして生まれたか¹⁾

ではお聞き下さい。喜びと苦しみについて皆さんに語りましょう。

一人の男についての、まだ誰も聞いたことがないような話です。それはこの世の出来事、英雄的行為²⁾と愛について伝えていきます。だからこそよく注意してこの物語をお聞き下さい。

かつて一人の王様がコーンウォール³⁾に居を定めていた。王の名はマルケと言った。

マルケ王は、ある王と激しく戦っていた。こちらの王は、スコットランドとイベルネ(アイルランドの別名)を支配していたとのことである。

さあしかとお聞き下さいよ。

そのマルケ王は、近隣の国々に使者を送り、多くの騎士が彼を助けるために進んで駆けつけるようにと伝えた。なにしろ、後者の王は傲慢にもしばしば強大な軍勢を率いてマルケ王の国を襲っていたからである。彼は海を越えて侵入して来ては、家来とともに多大な損害を与えていたのである。(51-76)

このような事情をある富強の王が耳にしていた。彼は、戦支度をした部隊とともに騎士らしく堂々とマルケ王の居城ティンタヨール⁴⁾にや

ってきた。彼の名はリヴァリーンといい、ローノイス⁵⁾が彼の領国であった。そのローノイスから、マルケ王を助けるために勇んで駆けつけたのであった。彼は、あたかも領国をマルケ王から封土として受けていたかのように、マルケ王に変わることなく忠実に仕えた。

皆さん、よく聞いてください。

彼は、マルケ王が国のあちこちで損害を被っているという話を聞いていたのである。それ故、彼はマルケ王のもとへ赴き、まるで家臣であるかのように、部隊とともにマルケ王に仕えたのである。(77-94)

しかしこのすべては、彼がマルケ王の妹を妻に得たいと願ったためにしたことであった。生命の危険を冒して、彼はついに彼女と共寝することができた。⁶⁾

彼女はリヴァリーンを愛していたので、戦が

Tintagel と呼ばれる — は、伝説のアーサー王の生地ともされている。トリスタン伝説の中の、街と港を備えたマルケ王の居城としてのティンタヨールは、実態とは関係がない。

⁵⁾ ブルターニュ北岸の St. Paul de Leon 地方にあたる。

⁶⁾ ゴットフリート(以下 G と省略)では、主人公トリスタン誕生の前史として、リヴァリーンとブランシェフルールの恋物語に1500行余りが割かれている。ここに至るまでのあらすじは以下である。

マルケ王の祝宴で行われた騎馬試合において、リヴァリーンはその卓越した武勇によってブランシェフルールの心を捉える。二人の挨拶から、やがて互いに思い思われる間柄となる。そんな折に、マルケの国を襲った敵軍との戦いで、リヴァリーンは重傷を負う。ブランシェフルールは変装して病床に瀕死の彼を訪ね、恋する二人は思いを遂げる。これによって彼は生き長らえ、彼女は身籠もる。

¹⁾ 各章の冒頭あるいは途中で置かれ、後続のテキストの内容を紹介するこのような文(2行または3行)は、Lichtenstein 版には見られない。

原文は *Wie Trÿstrand uff daß ertrich kam, / ungeborn dem sölch ler kam* であるが、Buschinger/Spiewok (mhd./nhd., 1993) の Nhd. 訳の注には「2行目は意味をなさない」とある。

²⁾ 原文は 'wavrhait' 「真実」だが、Buschinger/Spiewok (同上) のテキストもここは写本 D の 'manheit' を採っているのでこれに従う。

³⁾ 現在のイングランド南西端の州にあたる。

⁴⁾ コーンウォールの西海岸のこの場所 — 今日

終わった時、彼と一緒に国を出たのである。こうして自らの故郷を去ったこの婦人は、ブランシェフルールという名であった。

この婦人は、彼らが旅立つ前にすでに身籠もっていた。旅の一行が大海原に出たとき、婦人は大層苦しんだ挙げ句ついに命を落としたのである。⁷⁾ 婦人のその苦しみは、身籠もった子どもに起因していた。その後、婦人の腹が切り開かれ、胎内から男の子が取り出された。その子をリヴァリーンは国へ連れて帰ったが、その子はトリストラント⁸⁾と名付けられた。(95-114)

さてその婦人が亡くなったときの嘆きと苦痛は大きく、皆が深く悲しんだ。婦人の亡骸は、生まれた子とともにリヴァリーンの国へ運ばれた。多くの人が嘆き悲しむ中、ブランシェフルールはその地に埋葬された。

リヴァリーン王がこれ以上に悲しい目に遭うことがあったであろうか。彼は両手を揉み合わせて激しく泣いた。その場に居合わせた人たちも皆、彼と同じように振る舞った。彼らは棺台の周りに並んで、泣き叫んだ。このように彼らは、如何にブランシェフルールの死が彼らの胸に伝えたかを示したのである。

埋葬が終わると、リヴァリーン王は愛しい子を一人の乳母⁹⁾に預け、その子の世話を任せた。

乳母は、その子が馬に乗れるようになった日まで育てた。(115-137)

その後しばらくすると、リヴァリーン王は愛し子を今度は一人の男に委ねたが、その人はクルネヴァルという名であった。

クルネヴァルはその子に宮廷風のしきたりを十分に教えた。彼はまた豎琴を弾くことと歌うこともその子に教えた。後にも先にも、子どもがこれ以上に良く教えを受けたことはなかった。彼は、その子の教育において、名誉と称賛をもたらすことは何一つ忘れなかった。

その上、彼は、その子を他の子たちと存分に遊ばせ、手や脚を使ってできる様々な技を教えた。すなわち、それは石を投げること、走ること、跳ねること、抜け目なく格闘すること、男らしく強く槍を投げることなどであった。

彼はまたその子に物惜しみせぬこと、楯を持って騎士らしく乗馬すること、戦いにおいて如何に剣を振るうべきかを教えた。さらに彼はその子に礼儀正しく話すように、一度した約束を決して破らないようにと忠告し、もしも嘘つきになるほど愚かであるなら、まったく価値の無い者になると言った。(138-170)

彼はまたその子に、忠実であるように、いつも有能さを発揮するように、宮廷に相応しい振る舞いをするように、そして賢くよく考えて答えるように命じた。さらに、高貴なご婦人たちのためには、生命も財産も惜しまず喜んで仕えるようにと命じた。そうして彼はその子に告げた。熱心に学び、いつも礼儀正しくして、人中にいた時にはそこで聞き知った一番善きものをしっかり心に仕舞って置くようにと。

⁷⁾ ブランシェフルールの死は、Gではリヴァリーンの国に上陸して後のことである。

リヴァリーンがモルガンーリヴァリーンの主筋にあたる一との戦いで落命したことを知り、悲嘆のあまり苦しみ続けた末に男児を産み落として事切れるのである。

⁸⁾ トリストラント *Tristrant* の名は、Gでは *Tristan*、トマとベルールでは *Tristran* である。Gでは、その名が古フランス語の *triste* (traurig 「悲しい」) に関係づけられている。「悲しみから出たトリスタンというのが彼の名であった (von triste Tristan was sîn nam)」(2003行)。この関連づけは、Krohn (1980/1991) によれば、古い伝説に後から付け加えられたことで、言語学的には無理がある。

⁹⁾ Gでは、フロレーテが乳母の役目をしているが、彼女はリヴァリーンに仕える主馬頭「忠義者ルー

アル」の妻である。しかも、この孤児の誕生は秘密にされ、フロレーテが妊婦・産婦を巧みに装った後、自分が産んだ子と称するのである。

これは、リヴァリーンの世嗣の存在が、モルガンの知るところとなれば、必ずやこれを亡き者にしようとする企てのあることを恐れたためである。なお、Gでは、これより先にモルガンとの和睦が成り、リヴァリーンの子は難産で母親と一緒に死んだことにされていた。

こうして彼は、その子に高度の知識を与え、卑劣な行いはすべて禁じたのである。これ以上の話が必要であろうか。

要するに、彼はその子に徳を教えたのである。何しろ彼自身が、一つの悪を行うぐらいなら、それが彼にとって好ましかろうと辛かろうと二つの善を行うような心の人であった。その子に

も、彼はそうするように仕向けたのである。

その子があらゆる卑劣な行いを避けるようになるまで長くはかからなかった。少年もまた、師匠からするように命じられたことを何一つ疎かにしないだけの準備が出来ていたからである。(171-195)

3 マルケ王の宮廷への旅

トリストラントが父の国から、彼がまだ知らないマルケ王のもとへ赴くこと

クルネヴァルは、その子が苦しみと試練に耐えられるだけ十分に強くなったその日まで、その子の面倒をみた。それから彼は、少年の意向を確かめるために脇に呼んで言った。

「若君さま、私の言うことをよく聞いて、お父上にお願ひしてください。あなたがよその国々を訪ねることをお認めくださるようにと。あなたはご自分の国はよく御存知ですし、この国の人々は皆あなたに喜んでお仕えしています。しかし、よその国を知ることをこれ以上延ばしにするのは、あなたのためになりません」

(196-214)

ただちに少年は父王のもとに出向くと、礼儀正しく願ひの向きを口にした。

「父上、どうか私を行かせてください。これ以上ためらっているのは耐え難いのです。私は、よその国々をこの目で見てみたい。あなたの宮廷にいる人たちは皆快く私の願ひを聞き入れてくれますが、その人たち以外の人を知りません。異国へ赴き、多くの人と本気であれ戯れであれ、知り合うことができたら、どんなに私のためになるかしれません。たとえどんな困難があろうと、辛くはありません。それにまた若いうちに見ておきたいのです。よその国々ではどんな暮らしをしているのか。ですから、父上、私の願ひをどうか快くお認めください、そして異国へ行くのを助けてください。思うに私は、あなたのおそばに長く留まりすぎました」(215-239)

するとリヴァリーン王は答えた。「息子よ、喜んでお前の願ひを叶えてやろう」と。

リヴァリーン王は執事と相談し、彼に命じた。クルネヴァルが求めるものならすべて彼に与えるようにと。執事は、彼らに必要なものをすぐに調達した。

一方クルネヴァルは、宮廷の人々の中から高貴な小姓八人と、彼らと旅を共にする誉れ高い伯爵二人を選び出した。実際、彼らは快く承諾し、すぐに旅の仕度にかかった。彼らはこの役目を大いに喜んでいて。

一行には、立派な船室を備えた船が一艘用意された。船には、彼らにその後必要となるものが十分に運び込まれた。金と銀があり、宝石類と立派な衣服があったが、それらは人が望むものであり、また彼らに誉れをもたらすものであった。

それらを王は大量に積み込ませたが、それも王にとっては大した出費ではなかった。何しろ王は極めて豊かであったし、また喜んでそうしたのである。(240-267)

さて準備が万端整うと、トリストラント殿は父王に別れを告げた。旅の仲間も王に暇乞いをするので、一行は直ちに船に乗り込んだ。帆が上げられた。風は陸から沖へと彼らを運び、彼らの行く手を阻むことはなかった。

ところでトリストラントは、船中に馬を入れておくための小屋を作らせていた。船旅が終わって、彼らが上陸したときにその土地で乗り回すためであった。こうしてこの小集団は、ロー

ノイスから、彼らを知るものが誰もいないコーンウォールの国へと海を渡って行った。

このよそ者の一団が上陸して後マルケ王の国へと駒を進めるとき、トリストラント殿は仲間の皆に向かって等しく丁寧に頼んだ。彼ら一行がどこから来たか、また彼がどこの一族に属するかを秘密にしておくようにと。このことを決して口外しないと、皆が同意した。

さらに彼は、彼らが誰かに素性を咎められてもおのおの固く口をつぐんでいるようにと、厳しく命じた。「この地に、私の素性を知る者が誰もいないようにしたいのだ」と。

このような策を用いて、トリストラント殿はマルケ王に会えるところまで来たのであった。
(268-305)

彼がマルケ王の前に進むと、王は丁寧に彼を迎えた。トリストラントは礼儀正しく王に感謝して、次のように述べた。

「王様、もしお許し下さるなら、こちらの宮廷に留まり、あなたにお仕えする所存です。何しろ、あなたの宮廷については大変良い評判を聞いていましたので」

「ようこそおいでくださった」と富強の王は答えると、すぐに内膳頭¹⁰を呼び寄せるよう命じた。その命令は直ちに実行された。

内膳頭が現れると、王はこの若者の世話を内膳頭に委ねた。それから立派な王は、若者の手を取って宮廷内を案内し、家来たちには彼を親切にもてなすよう命じた。

さらに王は、主馬頭¹¹には、他の誰よりも良く彼のお世話をするように言いつけた。このことでは、主馬頭が宮廷の礼節をわきまえた人であることが明らかになった。思うに、彼は命じ

られたことは何一つ疎かにはしなかったのである。(306-334)

内膳頭とは言えば、王の覚えが大層めでたかった。彼は、豪華な祝宴のときにだけ、王の食卓の給仕に立ち会ったが、この特典を、王は彼に喜んで認めていた。というのも、彼が家柄の良い侯爵だったからである。彼に国を管理してもらい、いつでも王の国と名誉を守ってもらうために、王は彼に特別待遇を認めていた。

そのことをもっとお聞かせしましょう。彼は領邦君主であって、宮廷内に暮らす者たちは皆、彼の配下にあつたのである。彼の名はティナスといい、彼の居城はリタンという名であつた。彼は常に喜んで最善を尽くした。彼は、宮廷にふさわしい礼節をわきまえていて、富強の人であつた。このことを、彼は、トリストラントの場合にも常と変わらず立派に証明したのである。

彼は家臣に頼んだ。皆がトリストラントに親切に接して、決して辛い目に遭わせないようにと。彼らのそうした行為に対して、彼は金品で気前よく報いたのであつた。

少年トリストラントは、その並外れた才能のために大層有名になつた。彼はあらゆることにおいて他に抜きんできていたので、それがまた彼の名を高めずにはいなかった。朝も晩も彼は精進を怠ることはなかつた。

こうして少年は一人前の男に成長し、マルケ王の宮廷において尊敬されまた大いに称賛されるに至つた。そしてついには、彼が欲するなら刀礼¹²を受けるに相応しいとみなされたのであつた。(335-373)

¹⁰ 内膳頭 *truhsaeze* は、(諸侯の) 宮内官職の最上位のものの一つ。厨房・経済管理の全般がその管轄下にあつた。

¹¹ 主馬頭 *marschal* は、宮廷において馬の飼育に対して責任を負っただけでなく、部隊の補給と宿営も管轄した。

¹² 小姓を騎士の身分に取り立てる象徴化された儀式で、劍の峰で首、うなじまたは肩を叩く。

4 モーロルトとの闘い

モーロルトが要求を伝えてきたとき、

トリストラントが刀札を受けること

その頃、アイルランドに一人の貴人がいて、モーロルトという名であった。彼は四人力の持ち主であり、しばしばそれが証明されてもいた。それ故、彼が非常に恐ろしい男であることには、誰もがお気付きでしょう。彼は敵対者の多くを亡き者にしていたのである。

アイルランドの国王は彼の妹を妻としていて、この二人には非の打ちどころがなかった。モーロルトは堂々たる勇士であり、周りの国々を力尽くでアイルランド王に従わせていた。アイルランド王に貢ぎ物を贈るよう、この勇士から強制されなかった国は近隣にはなかった。ただ一国コーンウォールを除いては。(374-396)

ほかの国々は皆、モーロルトに屈服させられていた。しかし、若きマルケ王は彼の意に従わなかった。それがモーロルトの怒りを買ったのである。マルケ王が自分の意に従おうとしないのは屈辱と思えたからである。それ故、彼は、直ちに強力な軍勢とともに海を渡ってマルケ王を攻め、その国から彼の主君に貢ぎ物を届けさせようと決心したのである。

こういう場合にすべきように、彼は多くの勇敢な戦士を集めた。出陣を前にして、彼は王にこう言った。

「マルケがあなたに貢ぎ物を送ろうとしないのは、不愉快極まります。ですから、私は決めました。自分の命を失うか、彼の国中の女たちを嘆き悲しませてやるかです。そうしたら、彼は、意に反してでも、屈服してあなたに貢ぎ物を送るでしょう。さもなければ、たとえ何十年だろうと貢ぎ物を送るほうがまだ増しだったと彼が思うほど、略奪するまでです」

実際、彼の憤りは激しかった。こうして、彼は海の大波を越えて行った。(397-429)

海を渡って来ると、彼はマルケ王に使者を送り、簡明瞭に伝えたのである。マルケが 15

年以上¹³⁾も貢納を怠って来たのは大胆不敵であり、真に許し難い。彼に貢ぎ物を届けるようにと。また使者には次のことも言うように命じていた。

もしマルケ王の家臣に、一騎打ちで敢えて彼に対抗する者がいて、その者が高貴で自由な身分であるならば、

「その者は私と同等の身分である。私はその者と闘って、マルケが私の主君に貢ぎを納めるべきことを正当に証明するつもりである。

マルケがそれを拒否するならば、もう一つの機会を与えてもよい。その機会を逃せば、彼は国を失うことになる。すなわち、マルケが軍勢をもって私と戦うのだ。彼が守り切ったなら、私は彼の貢納を免除してやり、退散しよう。

貢ぎ物として私が考えているものを、彼に伝えるのだ。彼の国で生まれた 15 歳までの子らの三人に一人を、私は要求する。これを確実に彼に伝えよ。彼がそれを承知しないなら、私が自ら、娘と子ども、聖職者と信徒を、貧しかろうと富んでいようと、さっさと連れ去るつもりだ。その子らは私の奴隷となり、娘らは売春宿に入れてやる。娘たちは私のために朝から晩までそこで金を稼ぐのだ」(430-469)

マルケのもとへ使者が来てこれを伝え、マルケは天を仰いで、この酷い恥辱を神に嘆き訴えた。彼は国中の領邦君主に早馬の使者を立て、急いで彼らを宮廷に呼び集めた。モーロルトによってもたらされた恐怖と苦悩を、直接彼の口から聞くようにと。

このようなことが行われていたとき、トリストラントはクルネヴァルに言った。

「聞いてください、師匠。助言が欲しいのです。どうすれば良いとお考えですか。あの力持ちの男が露骨に示している傲慢さは我慢がなりません。誰一人彼と戦わないのなら、私が彼と戦っ

¹³⁾ 原文では「50年以上」(436行)だが、ここでは敢えて写本Hの「15年以上」を採った。

てみせます。神さまが私に力をお貸しくさる
ように。それにはどうしたらよいのでしょう」

クルネヴァルは熟慮の後に答えた。

「私の助言がお役に立つのなら、他の誰よりも
あなたに差し上げます。その闘いは避けた方が
良いと思います」

「いいえ、師匠。止めないでください。これに
よって、我々が利益と名誉を得るといふ幸運に
恵まれるかもしれません。彼が、誰からも戦い
を挑まれることもなくここから帰って行くな
ら、この恥辱から我々は二度と立ち直ることが
できません」(470-506)

師のクルネヴァルは言った。

「それがあなたの不幸にはならないと確信が持
てるなら、反対はしません。あなたの決意を知
ったからには、良かれ悪しかれ、たとえ何が起
ころうと、力の限りあなたをお助けします。そ
の時には、夜と昼をお創りになった神さまが、
あなたに力を貸して下さるように。わたしは
あなたの意志に従います。あなたを思い止まら
せることはできませんが、私の助言はお聞き下
さい。王さまに願い出て、この国の流儀に従っ
て騎士の身分に取り立てて貰うのです」

これは、若者にとって非常に好ましい助言で
あった。こうして彼は助言を直ちに実行に移し
たのである。(507-525)

さてトリストラント殿は内膳頭の手を取り並
んで王の前に進んで行くと、すぐにこう言った。

「王さま、わたしはこれまであなたに十分お仕
えしてきました。もしわたしがそれにふさわし
ければ、騎士になりたいと存じます。どうか願
いを叶えてください」

しかし、王は反対した。「今はまだ早すぎる。
あと一年待つがよい」

「王さま、決して早すぎはしないと誓って申し
上げます。どうか信じてください。賞賛を得よ
うとすれば、早くに始めて不断の努力をしなけ
ればなりません。刀札を受けて騎士になれたな
らどんなに嬉しいことでしょう。刀札を受けな
い訳にはいきません。それがかなうなら、騎士

の名誉を得るよう努めます」

王は、じっくり考えた末に、トリストラント
がそのために必要なものをすべて用意するよう
家臣に命じた。

トリストラントが、自分と一緒に刀札を受け
るようにと望んだ者たちも皆、同様に刀札を認
められた。こうして、優れた戦士たちの小姓六
十人が刀札を受け、騎士に任ぜられたのである。
(526-553)

さて、七日のうちに、国内の領主たちが多く
の立派な戦士を引き連れて宮廷に参集した。

トリストラントもまた若い騎士たちとともに
宮廷に馳せ参じた。彼らが揃って大広間に入
ると、周囲の者たちは異口同音に言うのであ
った。もっとも美しい騎士を選ぶとするなら、トリス
トラントを措いてないと。誰もがまた喜んでそ
れを認めた。

最も高貴な領主たちが招集に応じて皆やって
来た後、マルケは彼らに向かって、彼が今陥っ
ている苦境を訴えた。

「諸君、ここへ来てもらったのは、諸君の意見
を聞くためだ。諸君が一番良いと思うこと、諸
君がしようとする事なら、何であれ私は全力
を尽くして手助けしたい。少年時代からこの方、
これほど辛い知らせは聞いたためしが無い。あ
の怪力無双のモーロルトと戦うことを望むもの
が、この中に誰かいるならば、その者には、一
生の間ふんだんに使えるだけの富を報酬として
取らせよう」(554-584)

この言葉の後、皆は別々に離れて協議に移
ったが、彼らの中に敢えて戦いを引き受けよう
とする者は誰もいなかった。

するとそこにトリストラントがやって来て尋
ねた。なぜ、日がな一日相談ばかりなさってい
るのですかと。

領主の一人が答えた。

「ここには多くの優れた勇士や強い騎士が
いるけれども、我々の誰一人として、家臣の中
にモーロルトに立ち向かうほど勇敢な騎士を見
つけられなかった。実際、あの男はそのような戦

方を心得ているので、彼に挑戦する者は、ひどく危険な目に遭って命を失うかもしれないのだ」

「それならわたしが運を試しましょう」トリストラントが申し出た。

「私が皆さんの戦士となります。全能の神さまが、私に勝利をお恵み下さるかもしれません。モーロルトが私と戦うものとして、彼がわたしから命を奪うよりも前に、戦いが彼にとって苦痛となり、戦うことにうんざりするような、そんな勝利をです」

同時にまた彼は彼らに頼んだ。あの傲岸で不遜な勇士と彼が一人で戦えるように、口添えしてくれるようにと。そして言った。王様が彼に戦うことを許してくれるなら、彼が望み通りにモーロルトに立ち向かう勇気のあることが、皆にもわかるだろうと。(585-621)

この話を聞いて彼らは皆喜んだが、しかしこれほど重大なことを一人の若者に委ねてよいのかひどく心配になった。彼らはあれこれ考えた結果、文句は言わずに彼の決断に同意し、成功しようが失敗しようが運に任せることにした。

「きつとうまくいきます」と勇士トリストラントは言った。

「私は信じています。モーロルトが私に害を加えることなどできません。けれども、王様には、私のことを前もって言ってはなりません。あの勇士モーロルトと、彼によく対抗できる者を戦わせると、王様がお許しになるまでは」

トリストラントの願いを聞くと、彼らは王様のもとへ行き、次のような話をした。

「王様、あなたのお許しが得られるなら、モーロルトと戦うつもりの方が一人います。お許しになるのが至当かと存じます」

「その者が条件を満たしているならば、許すでしょう」と王は言い、それは一体誰かと尋ねた。するとひとりの有力な領主が話し始めた。

「王様、まずはお約束願います。その者が隷属民であれ自由民であれ、戦うことをお認めになると、彼が確信できますように」

「喜んでそれを認めると誓って約束しよう。私の援助をその者はあてにしてよい。彼の勇敢さがこの決断をさせたものとみえる」

これを聞くと彼らはためらうことなく、当の人物が若きトリストラントであることを明かした。(622-663)

するとモーロルトの使者たちがすぐに異議を唱えた。彼らの主君は身分違いの者と戦うつもりはないと。しかし、その言葉が若いトリストラントを苛立たせることはなかった。彼は使者たちに反論した。

「それなら、わたしが誰か、よくお聞きください。わたしの母ブランシェフルールは自由身分で高貴の生まれでした。父の名はリヴァリーンです。わたしはローノイスから参りました。マルケ王の妹の息子です」

このときマルケ王は、嬉しいと同時にまた悲しくなった。嬉しいのは、トリストラントが妹の息子であると分かったからであり、悲しいのは、トリストラントがその若さで大きな試練に立ち向かおうとしているからであった。

そこで王は大事な甥に対して言った。

「この私のために、この戦いは止めて、災難が降りかからないようにしなさい」

「何故でしょうか」

「わが甥よ、その訳は、この国の領主たちが皆臆病者と思われてしまうからだ。それに何故そなたがこの件を心配するのだ」

「この件がわたしにはどうしても不愉快なのです」

「それだけで、その身を危険にさらそうというのか」

「それは構わないのです」

「ここで見聞きしたことを恥ずかしいと思っっているのか」

「だからこそわたしは戦うのです」

「この国で起きていることのために、そなたが恥じることはない。これはそなたには関わりのないことだ」

「王様、戦いを断念することはできません」

「できるとも」

「できません」

「わたしが刀札を授けたあの日をそなたが迎えてしまったのは、何とも悲しいことだ」

「お辛いのですか」

「そうに決まっているではないか」

「一体何故ですか」

「あのときそなたに勧めたすべてのことが悔やまれる」¹⁴⁾

「そうして下さったではありませんか」

「今でもまったく同じようにするだろう。しかし、戦うのはやめてくれ」

「それはできません。たとえこの身に何が起きようとも」

勇敢な若者は、戦うことをやめないと本気で言うのであった。どれほど人が頼んでも全く無駄であった。

トリストラントが、このように頑固に言い張ったので、ついに王も腹を立てた。王は不機嫌そうに彼を見つめると、公然と言い放った。

「決して戦ってはならぬ」(664-717)

すると勇者トリストラントは、モーロルトと独りで戦ってよいと、家臣の前で約束したことを王に思い出させた。彼はまた、王の約束を取り付けたあの領主にもそのことをしかと思い出させた。その結果ついに彼は意志を貫き、戦うことが許された。

「これは驚くべきことだ」王は甥に言った。

「そなたは今命を失おうとしている。何のためかも知らずに」

「たとえ、モーロルトがわたしを打ち倒すことになっても、わたしは死ぬか戦う名誉を得る覚悟です」

「甥よ、命を粗末にしてはならぬ」

「モーロルトによって命を落とすことを確信し

ていても、わたしはこの危険を引き受けるつもりです。彼と戦う勇気のある者が誰もいないのを見て、彼が気を良くするよりは」

「この件は私に任せておきなさい」と王は言った。

「いいえ、決してそういうわけにはいきません」と勇者トリストラントは応じた。

「わたしは決闘をすると決めました。この決心はもう変わりません」

ことここに至り、王は使者を通じて勇猛なるモーロルトに伝えさせた。海辺近くの島へくるように。彼の望みが叶って、三日後にはトリストラントが彼に戦いを挑むと。またトリストラントが貢ぎ物をそこへ持参するので、そのときに、それを見るが良い。腕尽くであれ穩便にであれ、それを手に入れられたなら、国に持ち帰るがよろしい。返事を待っていると。(718-761)

マルケ王がこのように語ったとき、モーロルトの使者たちは腹立たしい気持ちにさせられた。彼らは宮廷を離れると予て約束の合流地点へと急ぎ、モーロルトの到着を待った。

モーロルトが到着したまさにその時、彼が何を言ったか、さあお聞きなさい。

「マルケ王は私に何を言づけてきた」

彼らは答えた。「一騎討ちあるのみです」

「それは本当なのか」

「実際その通りです」

「して一騎討ちの場所は」

「このすぐ近く、島の上です」

「その島はどこだと」

「ここから程近くです」

「詳しく話してみよ。一騎討ちの日はいつだ」

「明後日の朝早くです。それがマルケ王の要求です」

「私と戦うのは一体誰なのだ」

「あなたに戦いを挑むのは、彼らのうちの一人、マルケ王の妹君の息子です。最近刀札を受けたばかりです」

この報告はモーロルトをひどく怒らせた。彼は、大軍勢の前で力一杯吹き鳴らされる角笛の

¹⁴⁾ Gでは、刀札の後、マルケがトリスタンに与える訓示の中に次のようなことばがある。

「謙虚にして人を欺かず、誠実にして礼儀正しく、弱者には常に親切に、強き者には常に誇らかであれ」(石川敬三訳、5029-32行)

ように、怒りに燃えた。それは、彼に戦いを挑む勇気のある者がいたからであったが、彼にはそのことが全く不可解であった。(762-787)

さて三日目の朝早く、モーロルトは戦の支度をして取り決められた場所へと駒を進めて来た。マルケ王もまた自ら強大な軍勢を率いてやって来て、海岸近くに待機した。マルケ王の家来たちは馬から降り立って、天幕を広げた。天幕が張られると、マルケ王は、大事にしていた立派な甲冑をそこへ運ぶよう命じ、それをトリストラントに与えた。彼は自らの手でその若者に武具を着けさせた。それはまことに好ましい光景であった。そこには王の優しさが現れていた。

王はまた彼に自分の馬も与えた。それは、大きく、強く、姿の良いカスティリア産の馬¹⁵⁾であった。馬衣には多くの装飾が施され、ヴェローナ産の金細工¹⁶⁾も付けられていた。馬勒は、その馬にふさわしく、銀で作られていて、黄金で覆われていた。

これらを王は甥のトリストラントに気前よく与え、さらにかなり幅の広い刀身の剣も与えた。その剣は、怒りを込めて振ると、鋼の甲冑でも突き通すのであった。これに加えて、立派な真新しい楯も運ばれて来たが、それは丹精を込めて作られたものであった。(788-819)

(つづく)

¹⁵⁾ スペイン産の馬は、中世の時代にはその耐久力と堂々たる体軀のために特に重んじられた。

¹⁶⁾ 原文は mit bernischem golde(808 行)。
bernisch = veronisch で、イタリア北部にある都市ヴェローナ Verona は、中世にはドイツ語で Bern (Bërne) と言われた。

テキストと参考文献

1 使用テキスト

Eilhart von Oberg. *Tristrant und Isalde* (nach der Heidelberger Handschrift Cod. Pal.Germ.346).

Herausgegeben von Danielle Buschinger. Berlin 2004.

(Berliner Sprachwissenschaftliche Studien Band 4)

Eilhart von Oberg: *Tristrant* –Universitätsbibliothek Heidelberg, Cod. Pal. germ. 346

(<https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/cpg346>)

ハイデルベルク大学図書館がインターネット上に公開している写本 H の写真版

Eilhart von Oberg. Herausgegeben von Franz Lichtenstein. Hildesheim/New York 1973.

(Nachdruck der Ausgabe Straßburg und London 1877)

Eilhart von Oberg. *Tristrant*. Synoptischer Druck der ergänzten Fragmente mit der gesamten

Parallelüberlieferung. Herausgegeben von Hadumod Bußmann. Tübingen 1969.

(Altdeutsche Textbibliothek Nr. 70)

Eilhart von Oberg: *Tristrant*. Edition diplomatique des manuscrits et traduction en français

moderne avec introduction, notes et index par Danielle Buschinger. Göppingen 1976.

(Göppinger Arbeiten zur Germanistik Nr. 202)

2 現代ドイツ語 (Neuhochdeutsch) 訳

Eilhart von Oberg. *Tristrant und Isalde*. *Mittelhochdeutsch/neuhochdeutsch* von Danielle

Buschinger und Wolfgang Spiewok. Greifswald 1993.

(Greifswalder Beiträge zum Mittelalter. Serie WODAN Band 27)

Eilhart von Oberg. *Tristrant und Isalde*. *Neuhochdeutsche Übersetzung* von Danielle Buschinger

und Wolfgang Spiewok. Göppingen 1986.(Göppinger Arbeiten zur Germanistik Nr.436)

3 散文民衆本

Tristrant und Isalde. *Prosaroman*. Nach dem ältesten Druck aus Augsburg vom Jahre 1484,

versehen mit den Lesarten des zweiten Augsburger Druckes aus dem Jahre 1498 und

eines Wormser Druckes unbekanten Datums. Herausgegeben von Alois Brandstetter.

Tübingen 1966. (Altdeutsche Textbibliothek. Ergänzungsreihe 3)

4 参考テキスト

アイルハルト作以外のトリスタン物語については、以下のテキストを使用した。

Berol. *Tristan und Isolde*. Herausgegeben und übersetzt von Ulrich Molk. 2., verb. Aufl.

München 1991. (Klassische Texte des Romanischen Mittelalters in zweisprachigen

Ausgaben Bd. 1)

Thomas. *Tristan*. Eingeleitet, textkritisch bearbeitet und übersetzt von Gesa Bonath.

München 1985. (Klassische Texte des Romanischen Mittelalters in zweisprachigen

Ausgaben Bd. 21)

Gottfried von Straßburg. *Tristan*. Nach dem Text von Friedrich Ranke neuherausgegeben,

ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort

von Rüdiger Krohn. 3 Bde. 2., durchgesehene Auflage. Stuttgart 1981.

ただし、第3巻は、初版 1980 と改訂第3版 1991 (3., neubearbeitete Auflage 1991)。

5 トリスタン物語の邦訳

・ベルールとトマの断片

ベルール（新倉俊一訳）『トリスタン物語』『フランス中世文学集1—信仰と愛と—』白水社、1990年、149-267頁。

トマ（新倉俊一訳）『トリスタン物語』同上書、269-354頁。

佐藤輝夫『トリスタン伝説—流布本系の研究』中央公論社、1981年。

同書の「資料篇」に、ベルール作『流布本系 トリスタン・イズー物語』（423-586頁）とトマ作『風雅体本 トリスタン物語』（587-786頁）が収められている。

・ゴットフリート

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク、石川敬三訳『トリスタンとイザルデ』郁文堂、1977年改訂第二版、1992年改訂第五版。

・ジョゼフ・ベディエ（フランスの中世文学者）がトリスタン伝説の原型として復元した物語

ベディエ編、佐藤輝夫訳『トリスタン・イズー物語』岩波文庫、1977年第25刷、1985年第32刷改版。

・散文民衆本

小竹澄栄訳『トリストラントとイザルデ』（ドイツ民衆本の世界VI）国書刊行会、1988年。

・アイルハルトの断片

アイルハルト・フォン・オーベルク（小澤昭夫訳）『トリスタン物語』（前編・後編）『北陸学院短期大学紀要』第19号1987年、第20号1988年。

上記のHadmod Bußmann編集による12世紀の写本断片三種の対照テキストを訳出したもの。

・ハンス・ザックスのトリスタン劇

ハンス・ザックス（小澤昭夫訳）『トリストラントとイザルト—悲劇7幕』（前編・後編）『八戸大学紀要』第20号2000年、第21・22合併号2001年。

6 参考文献

Artus- Lexikon. Mythos und Geschichte, Werke und Personen der europäischen Artusdichtung. Von Rudolf Simek. Mit 32 Abbildungen. Stuttgart 2012.

Deutschsprachige Literatur des Mittelalters. Studienauswahl aus dem 'Verfasserlexikon' (Band 1—10) besorgt von Burghart Wachinger. Berlin/ New York 2001.

Lexikon des Mittelalters I - IX. München 2003.

Wilhelm Volkert: Adel bis Zunft. Ein Lexikon des Mittelalters. München 1991.

グラント・オーデン著、ポーリン・ベインズ挿画（堀越孝一翻訳/監修、関哲行・石渡明夫・網野公一・川野美也子翻訳）『西洋騎士道事典』原書房、1991年。

三浦権利『図説 西洋甲冑武器事典』柏書房、2000年。

執筆者紹介（所属）

小澤 昭夫 八戸学院大学 健康医療学部 人間健康学科 教授